

# 生きる

山内 常男

## 肝機能低下ってなあんだ？

昭和54年1月、40歳で行政事務所を開設し、毎晩遅くまで働きつくめも、やっと見つけた好きな仕事なので若さで無我夢中でした。それでも健康が気になり、湯島の診療所で人間ドックに入ったのが58年6月の44歳の時です。この時「肝機能が低下しているので一カ月後の再検査を。」と指導されたのです。でも私には『肝機能低下』って何のことだかサッパリ判らない、せいぜい『脂みのない肉を食べれば良い』ぐらいの知識しかありませんでした。続いて60年7月の人間ドックでは「減量するよう」指導があり、次の63年4月の人間ドックや平成元年4月の時でも前回通りの指導内容でした。

「次は別な診療所に行こう。」平成2年6月に新宿高層ビル内の診療所の人間ドックで、「肝障害を認めます。再検査を受けて下さい。」と医師に告げられ強いショックを受けました。

仕事上のストレスは山程あるけれど、飲酒はしないし、タバコも吸わない。

「一体、原因は何なのだ！」思い当たらないまま時間が過ぎれば忘れてしまう。そして5年8月の6度目のドックで医師から「肝機能障害につきB型C

型肝炎のチェックを受けて下さい。」と指導を受けたのです。今度だけは必死の思い、8月半ば板橋中央病院消化器科に駆け込み、採血の結果、主治医から『慢性肝炎』と診断されたのでした。

湯島のドックで肝機能低下と言われた時に、医師を信じ、謙虚に受けとめなかったことが悔やまれました。自分の健康を害したのは自分自身なのであって誰のせいでもありません。

## インターフェロンって？

平成5年10月、板橋中央病院に入院し『肝生検』を受け、肝臓の一部を採取され、検査の結果『C型肝炎』と診断されました。6年8月中旬に血管造影検査で入院。8年7月から8月まで入院し、主治医の山口先生によってインターフェロン投与を受けました。

インターフェロン治療は最近見つかったもので、投与の効果は20%から30%で、患者によってはサッパリ効かない場合もあるとのことでした。私は主治医を信頼しているので副作用も心配はしませんでした。通院での注射は翌年1月まで続けました。山口先生は優しい口調で「頑張ろうネ」とはげましてくれ、今も嬉しく思い出されます。

9年3月中旬に入院し血管造影やC

Ｔスキャン、エコー等の検査があり肝炎の進行をチェックしてくれました。退院後は強ミノＣの注射でしばらく通院。山口先生がお辞めになり、肝臓専門外来の山中先生が主治医となりました。診察の時に山中先生に「肝硬変の疑いがありますか？」と尋ねたところ、「以前から肝硬変になっています。」「エコー検査で白い斑点が見つかり、大きくなると細胞ガンに進む場合もあります。」と説明して下さった。山中先生は処置が素早く頼り甲斐がある先生です。

#### 肝細胞ガンの疑い

平成6年8月の血管造影やエコー、ＣＴスキャンで、最初は米粒大の斑点が見つかり検査の度に少しずつ大きくなり、13年12月には8ミリ大になっていました。山中先生は診察室で「99%限りなく肝細胞ガンの疑いがある。大きくなる前の今ならば、ラジオ波治療が可能だから来年やりましょう。」と。

翌年の14年2月中旬入院し、ラジオ波治療を受けました。オペ室で両足の電極をつないで、へその脇からカメラの管を通し、おなかにガスを注入し蛙のようにプックラ膨らませ、カメラの映像がモニターに写されました。

山中先生は「思っていたよりはきれいだね」と。

モニターを見て私は「自分の肝臓が見えるっていいですね。」と言

いました。山中先生はモニターやエコーで確かめながら肝臓の斑点に電気針を刺し「頑張ってネ。我慢してネ。」と声を掛けながら7回ほど通電されました。その度に腹の中の肝臓が焼けるように熱くなり、痛むのです。やがて山中先生は「成功したヨ。斑点が2ヵ所あって、きれいに切り取ったから心配ないヨ。」オペ台に乗ったまま私は「ありがとうございます。」と先生やスタッフはじめ看護婦さんにお礼を述べました。

#### インターフェロンの再投与

山中先生は「ウイルスが残っていて肝硬変になっている。ウイルスを減らすためのイントロンとレベトール併用の治療が開発され効果が見られるが副作用もある。」と。「再投与をお願いします。」と私は懇願しました。

今年の7月から8月にかけて入院し再投与を受けたのです。幸いに平成8年のインターフェロン治療時のような副作用はありませんでした。再投与で入院の一カ月間は、毎日が希望に満ちあふれていました。主治医の山中先生を信頼していたからです。

退院後も週に3回イントロンの注射で通院中です。しかし、副作用が出始めました。駅の階段を2、3段登ると息切れがして立ち止まり、呼吸を整えて登る、膝の関節も痛いのです。特に辛いのは亜鉛不足で口の中が苦くなることでした。味覚障害とでも言うので

しょうか、何を食べてもおいしく感じないので食欲が薄れ、体重もなかなか増えないのでした。

### どんと来い！ 肝硬変！

入院中は毎朝6時に起床し、屋上で真赤な太陽の光とエネルギーを体一杯に浴びながら5分ほど体操をします。太陽に向かって「頑張るので力を貸して下さい。家族や事務所に係わりのある方々を幸せにして下さい。」と声を出しました。

日野原重明先生の『生き方』に関する著書を何度も読み返しました。著書は心地良く、元気で仕事をする姿をイメージトレーニングすることで元気を取り戻し、『生きる喜び』が体中にみなぎってきました。入院中は仕事に神経を費やさず、のんびりと療養に専念しました。一カ月の入院が早く感じられました。

自分のC型肝炎が、昭和35年6月に輸血を受けての椎間板ヘルニア手術が原因で、23年後に人間ドックで肝機能の障害が指摘されたのです。この時すぐ血液検査を受け適切な処置をすれば、悩まずに済んだかも知れません。この時、『慢性肝炎』なんて想像したこともありませんでした。予防医学の大切さを今になって痛感しています。今は、主治医の山中先生やスタッフ、そして看護婦さんに感謝しています。

### 或る日の風景

『ホスピタル』には「厚遇する、厚

遇サービス」の意味があります。板橋中央病院の看護婦さんに共通したことがあります。それは患者さんをお願いや気をつけて頂く時に「〇〇をやって貰っていいですか？」と。なんて美しい言葉でしょう。

また、入院中に山中先生は「病気を治すのは私ではないんだヨ。必ず治すんだという患者さんの強い意志が病気を治すんです。私も頑張るから、あなたも頑張るって。」と励まして下さった。退院後はお陰でウイルスが激減し元気に暮らせるのも、主治医の先生や看護婦さんの励ましのお陰で、感謝しています。

思えば、結婚後に椎間板ヘルニアの手術や好きな仕事を探し求めて転職や転居の連続。やっと見つけた自営も毎日の仕事中心で、家庭サービスが足りなかったと思います。郷里の親や兄弟にも迷惑を掛けっぱなしでした。親孝行の真似事さえもできていません。

今…10月の秋晴れ。自宅近くの郷土資料館や東京大仏を家内と語らいながら散策します。

そして「生きるってなに？」の答えを見つけることができました。それは「感謝し合って活かされながら生きる」ことだと……。